齋藤兼光

阜莢之縁起

大澗尊庵

常夏考叉撰

特 7
129

国立国会図書館　タイトル『皂莢之縁起』　請求記号 特7-129

ガラス使用

特7-129

帝國圖書館藏

齋藤一白圖著

皂莢之緣起

附一白圖高蔭兼光略歷　伊藤寫太郎

大淵蕚庵著

常夏考

著者不明

冬梅考

伊藤寫太郎藏

国立国会図書館　タイトル『皂莢之縁起』　請求記号 特7-129

ガラス使用

冬梅考　著者未詳　全

伊藤篤太郎記

皂莢之縁記

一白圃齋藤嘉光著

常夏考

蕙亭大淵憲淳著

附齋藤嘉光略歴

理學博士伊藤篤太郎校

国立国会図書館　タイトル『皂莢之縁起』　請求記号 特7-129

ガラス使用

伊藤篤太郎記

皂莢之縁記

江戸種樹家一白園齋藤篤光著

完

冬梅考

著者未詳

全

齋藤篤光（一白園又花友）―女―トシ（婿八束蓋）―金蔵

小石川区諏訪町四九
住し左に今多五郎
牛込区西五軒町廿三番地
格軒文

伊藤篤太郎ノ梅ニ大淵憲源ハ長ニ
棟菴大淵祐元ノ男。祐元翁ハ余ガ
王父錦窠（圭介）先生ノ友人ニテ余モ
親シク氏ニ梅ヒ。徳川氏ノ侍医法眼ト
ノ明治維新後迄ヲ別髪文ノ大致顧ヲ
保存シ居リ

齋藤宗兼光ハ名ヲ庄十郎ト曰ヒ花友ト號ス。江戸
種樹家ナリ、最モ白花ヲ蒐集スルヲ好ミ、純白花ノ
草木一百品ヲ選擇シテ之ヲ家園ニ栽培ス。故ニ園ヲ
百白園ト稱シ、彼ノ一百白花ヲ自ラ寫生シ彩色ヲ施シ
題シテ「一白画譜」ト云フ。蓋シ後ニ年栗本鋤雲ノ
注意ニヨリ百白園ヲ改稱シテ一白園ト云ヘルヲ以テナリ。
文化八年六月宮江戸四谷大番町ニ生ル。三歲ノ時、
不幸ニシテ父母ヲ喪ヒ、祖母ノ手ニ養成セラル。幼ニシテ父ノ跡ヲ繼ギ、
家祿十五俵一人扶持ヲ賜フ。文政十一年十九歲ノトキ德川幕
府ノ賄方トナル。幼ヲ物ニ寄ス。後ヲ少ク門巡ヲ爾ニ後ス。
板ノ扶ニ今鳩山一郎氏ト共ニ明治廿三年三月共ニ病ヲ
罹リテ長逝ス。時齡八十有三、小石川巡茗荷谷町

明照寺ニ葬ル。大正七年間東京市区改正ノ為メ墓地
ヲ市外ニ移轉セラルトカ、明照寺ハ廢寺トナル。依テ
齋藤家ノ墓ヲ市外雜司ヶ谷共同墓地ニ改葬ス。余
大正八年五月六日郷友柳田信貫翁相伴フテ一白
園ノ墓ヲ展ス。齋藤家ノ墓地ハ單ニ「齋藤代々
之墓」ヲ刻シ側面ニ「明治二十年六月建立」トカルノミニシテ
墓碑前ニ一白園ノ墓ト別ニ表シ、傍ニ超エテ同園
八ノ東京市牛込区西五軒町共同墓地ニ翁ノ遺稿ヲ訪問シ、
翁ノ写真一葉(手札形)ヲ見ル。八十有餘ノ老翁、
病後顏色憔悴ノ狀、歷然タリ。翁ノ遺稿
「一白画譜」ハ翁ノ植物寫生圖ト共ニ拔粹シテ之ヲ

冬梅考

著者未詳

全

国立国会図書館　タイトル『皀莢之縁起』　請求記号 特7-129
ガラス使用

冬梅考

著者未詳　全

皂莢之縁記

鎌倉より奥羽海道の一里塚千代田村にトケナシの皂莢の大樹昔より有
来りしか此地江戸御城建築成りし後本城と西丸の間に則西丸坂下御門内廣濶中央
に同樹繁茂したるを徳川三代家光公（大猷院殿）寛永年間メテサセタマヒ此皂莢代世枯朽
せざる様とて延寿の名稱下しタマヒ其後柵を作り尚培養アリテ益御愛樹既
に嘉永年間迄年久しと雖に依然たる大樹なり此一枝を圖らずも得たるに
則嘉永五壬子年二月事なりしか即園中に梓木とうたんに忽ち根を下し甘露盛今
に照然たり茲に思ふに嘉永六癸丑年（徳川十二代家慶公傾德院殿御時）亜米利加使節突然浦賀
に初めて外夷登營を許せしの事なり其年此親木終に腐朽枯死成て柵と共に
跡方を不見に寔に可惜の事にてはあれ然れとも梓木益盛木今尚保存し愛樹する
又不思ギとやこの故に文節を捨て禿筆を換舌とシテ愛樹の由来を記し置者ナ
リ

一白圃花友

木画譜

五冊トナセリト翁の孫金蕊氏の話
なり。未だ他にも植物の写生図アリしが翁の歿
後、他に出したりと云へり
茲に齋藤一白圃の遺稿を自ら勝写ぜんこ
を望み、翁の略歴と共に余の記しを開知見願
ふ。
時日、日本植物史の材料に
資せんと

文政八年五月　伊藤信徳

『皂莢之縁起』大正八年五月八日一白園齋藤氣光翁ノ遺
様ヨリ借覧シテ直ニ之ヲ復寫ス

東京御殿山小字東三軒家自宅ニ於テ
理學博士 伊藤篤太郎記

伊寫梅 明治十五年十一月十日
東京青山淀橋草木園地蒔置ツミカヤノ苗ヲ移植シタル淀橋会
出品目録（移本）別ニ版ヲ改メ但シ著者自筆ニ「コサイカチ」園産ヲ説ク曰、
『コサイカチ 和名 Gledit schia sinensis 皇城坂下門内ニ大樹アリ
葉ハサイカチノ如クニシテ小ク莢亦短小ナリ樹ニ刺ナシ
古来数説アリエンピュトニ云ヒ又服部雪齋七十二候年
著ス本草図説ニ附ス 蓋シ本伝ノ樹也

伊藤篤太郎記

常夏考

蕚庵大淵憲源著

全

冬梅考

著者未詳

全

国立国会図書館　タイトル『皂莢之縁起』　請求記号 特7-129
ガラス使用

大正八年五月八日余東京市牛込区四五軒
ヤシキ内ニ一白圃藤花及ノ遺植を訪フ
一白圃翁ノ娘（名ヲトシトシテ）並其婿藤原光花孟孫
金蔵ト三氏出デ、藤棚ス一白圃翁ノ遺品ノ
寄示ニ翁ノ写真一幅ト三四ノ植物ニ関スル書
数ヲ示サル、其書ハ一白圃花及ノ移『皂莢之
縁記』・大淵憲源移『常夏考』及其他不明ノ『ふ
ゆなり』三種ヲ供原ヲシテ自ラ謄写スト云フ爾
大正八年五月　伊藤篤太郎識

冬梅考

著者未詳

全

常夏考

真種常夏

和名　トマリグサ　古名　ナツカシグサ　古名
チヽコグサ　同　ヒクレクサ　同
トコナツ　同　ナデシコ　古今通名
ヤマトナデシコ　古今集　カハラナデシコ　俗名
チヤセンバナ　奥州　遠州　サツマナデシコ　九州
ヒクラシグサ　ヒクラシ日草　カタミクサ　莫傳抄
カラナデシコ　古今集　ナデシコ　牛麥　万葉集
金錢　自氏文集　撫子　歌書
漢名　瞿麥　本草綱目　聖龍鬚　輟耕錄
句麥　通雅　地麥　品字箋

石竹　錦竹

釋名　錦竹

秘傳花鏡　十姉妹　河間府志　他物同名アリ

閩書南産志

常夏ハ瞿麥ノ異名トスレトモ自ワカラ瞿麥トハ別物ニシテ真ノ常夏ハ一年常ノ瞿麥ト異リ草枯レスシテ花冬ニ小リ而シテ四季常ニ開花ス故ニ夏ヲトコシナヘニスルト云ヒシテ名ケシモノナランカ花色真紅ノミニシテ他色ナク甚タ愛スヘク觀ルヘシ又野生瞿麥モ別ニシテ常ニ紅ニ花咲クヲ以テ故ニ常夏ノ名ヲ唱フルナリ然レトモ常夏ハ源氏三十六卷ノ名ニシテ原源氏三十六歳ノ夏玉カヅラヲ花ニ寄セテ讀ミオクラシ歌ヲ以テ卷ノ名トセルヨト湖月抄ニ詳カナリ　其歌ニ

ふてゝしこのとこなつくしき名をこゝに
そとはらきみをくやしらるゝ

此草昔大和國及近江其他畿内近傍等ニ夥多アリシモノナランニ數年ノ久シキヲ歴年ノ土地ノ開ケ行クニ隨ヒ遂ニ今ハ殊外稀ナモノトナルナラン近年サツマナテシコヲ以テ真ノ常夏ト云フモノアレトモ是一種ニシテ時珍所謂洛陽花ニシテ花ハ大ニシテ花色種々アリテ美麗ナリ故ニ真ノ常夏ニ非ス今ノ常夏ノ四季常ニ花咲クヨト疑ヲ容レザルヲ証明セシニ古人ノ詠歌種々アル中ニ三首ヲ録シテ例センニ

後撰ニ、十月常夏ヲおくれるとて

みるたびに　かゝる露ぞ　ぬきをかぬ　ぬれぬ　ぬれぬ　ぬれぬれば

国立国会図書館　タイトル『皂莢之縁起』　請求記号 特7-129
ガラス使用

むへとこそ思つゝ　定家卿の歌ゝ

春ゝ雪の朝ゝ　もらの冬ゝられゝ

一花さくやまとあてしこ

みつねの歌ゝ

梅をゝり　すゝ　ゝとおもふ時より

いまとわのぬゝ　ゝとあつの花

常夏ゝ花紅キ　證明セシニ

湖月抄常夏し　ゝをゝてしゝの花をおくり

作りしゝみを　青き硯ゝ書詠め徒ひつけしを

大ゝ田金人の野鼎　ゝ振舞を咽はれしゝり

おき花ゝ佐ひなゝ　硯に多ゝうくゝるゝて

凡て硯のいろの花のいろと是ひていいと野鼎ゝる

ゝと思ゝ　ゝ　ゝ傳自書跡ゝ載ゝ歌ゝ

古ゝとこれゝそ思ふ　ゝこゝにゝゝし　ゝの硯のゝれゝる

比歌常夏の花おきゝる　ゝ

撫子　ふでしこゝ　ゝ接てゝゝくしむへきゝ花ゝれいとて名く

此花ゝ和國近ゝ　ゝ　ゝ歌ゝ　ゝ　ゝ　

常夏トハ常ト云ヒ或ハ常ト云ヒ故ニ万葉集ニモ立山ノ雪ヲ
読ん歌ニ「常夏ニまさえ」ト云ヒ又一証トナスベシ
大鏡裏書ニ云、染殿大后少之時容姿艶麗、号瞿
麦御、取美麗艶色、多改瞿麦、稱常夏花、蓋避
諱也云云、此説餘材拔ニ見エ尼寺ナルヤ赤タ知ラス
以上説明證引ル所ニ於テ常夏ハ常ニ紅色花咲クヲハ
疑ヒ答レサルベシ又瞿麦ト石竹トヲ互ニ同物視スル原ヨリ
二物ナレ共瞿麦ヤマトナデシコ石竹ハカラナデシコト説別ア
レハ自然別品ナラン如何ントナレハ石竹ハ内地ニ野生ナレ共ナデシコハ
唐ナデシコト稱シ野生アリ然ニ花戸培養ス可キ花園
ナデシコトニセテ一種ノモノナリ又寒ナデシコト云フアリ是又真
ノ常夏ニ非ズ常夏常ニ花咲ク故ニ俗ニ四季咲

ナデシコ或ハ不断ナデシコ等云ヘドモ真ノ常夏ナレハコソ
常盤瞿麦ト云方稱常ナラン欲又染殿后ハ偉ヲ避
ケテ瞿麦ト改メ常夏ノ花ト称スト云ヒテ常夏ハ
撫子ノ異名ナリト唱フレ共是大ナル誤解ナラン且又此説
ノミナル共ハ常夏ノ名ハ出ル事ハ不当ナル似タラン
欲世ノ識者ヲ俟ツ

芍庵大淵憲源識

真種常夏ノ来

此草古源氏常夏ニみをつくしこころをぞしる
世のみちりあるそらえさせもしらぬ
花ちれは真種常夏といふ時分
なり 故ニ中國ニ多ク

冬梅考

著者未詳

全

国立国会図書館　タイトル『皂莢之縁起』　請求記号 特7-129
ガラス使用

冬梅考

著者未詳

全

ありしを惜まるゝ人もれども當所の外絶て尾戸跡其種全く絶え根跡をのこさざりしが年来栽培して非常の熱心家なる一白圃藤の花を翁痛くこれを慕ひ頻りに求めへる配して求もれ共夏を真物を得ず依る一考するに幸知人の遊賀浦に在るあり直に同國人某と共を歴て之を依頼し供送を約せしに既に五年の星霜を歴始めて報じ来る近江膳所の城下に於て真種を得たりと送越し来れるのを得る安堵其書翼一朝の幸を非ざるを知るべきなり星霜一度秋なりと雖も同翁七十有餘一根恵與せられ示して云云且一片の覚記を依て舎亦同偏素乳 敢て辞さず不學を顧みず禾を採り南谷子常夏の如く頻を赤くし草移を記す于時明治十あまり九の夏初の旬ありと云爾

（完）

冬梅考

著者未詳

全

伊藤篤太郎記

国立国会図書館　タイトル『皀莢之縁起』　請求記号 特7-129

ガラス使用

ふゆむめとはなり

冬梅 大和本草ト云フ其類一種

ふゆむめ本朝食鑑ニハ八月梅ニアラズ今稀ニアル所ノ花ハ單瓣白色紫蕚ニテ野梅ニ似タリ實ヲ結フコト多カラズ形圓クシテ青シ八月頃迄アリ熟セズシテ落ルモノナリ和漢三才圖繪ニ秋熟スレバ秋梅ト云フベシト云ヒ大和本草ニハ八月梅秋ミノルト云ヘリ怡顏齋梅品ニ載ル所モ是ナリ又麻布白銀ニ梅ヶ茶屋ト云フアリ此茶屋ノ梅實歲ヲ越ル故世人是ヲ冬梅ト云フト新編江戸志ニアリ此種ハ普通ノふゆ梅ト違ヒ其花潔白ニシテ蕚青ク緑蕚ニテ少シ色アリ花瓣圓カナラズ細キ瓣ニテ小輪ナリ其香ハナハダ高ク数歩ニ匂フ遊行上人ノ和歌アリ此梅ノ實昔ク手ヲコセシト虽モ今ノ木ハ七八月ニハ黃熟シテ落ルト云ヘリ實ノナリハ桃ノ如ク中形ニシテ梅子トナスニ佳ト云フ今存スル古木ニ非ズ其元木ハ枯ヲ殘シ其傍ヘ實生ヲ

植添シカヒコハヘノ生長セシモノカ二本生出テ三四間モハビコレリ又多麻郡青梅村金剛寺ノ梅モ秋スギ葉落レ花實ハ落ズ（百花種藝錄）シテ青ケレバ青梅ヲ以テ村ノ號トセシトゾ其實ハ苦クシテ食スルニタヘズト云フ未ダ其花實ヲ見ズ且其木ノ存亡モ知ズ

スベテ此類西土ニ所謂冬梅ノ類ナルベシ

本朝食鑑云一種有冬梅者不殊尋常之梅惟花實俱小耳五六月結子到冬不落而青活（ナリ）冬月味酸熟然（ル）不足爲菓而可爲不時之珍矣

大和本草云八月梅秋ミノルト上州ニアリ

增補地錦抄云ちくゝ なり白梅ヒトヘナリ實ハ九十月時分マデ青ク木ニ付テアリ

怡顏齋梅品云冬梅和名ふゆむめ江陰縣志云十月始熟者爲冬梅

遠梅花自ノ單ニシテ冬月青キ實有花觀ルニ足ラズ此種京師相國寺浴室ノ側ニアリ又洛東聖護院宮御境内之西坪内ニアリ

百花種藝錄云武州多麻郡青梅村金剛寺ノ庭ニ大木ノ梅アリ花ハ白シ子ハ小サク味至テ苦シ始終熟スルヿナシ秋過キ葉ハ紅葉シテ落シ已實ハ落ズシテ青シ仲冬蕾ヲ含ム頃落ルナリ此梅ニ依テ其所ヲ青梅ト云ヘリ當青ハ平濤門ノ祈願所ナリ此梅モ將門手ヅカラ植給フト云梅ルニ此梅ハ蓋シ中華ニ所謂冬梅ノ類歟

新編江戸志云梅ガ茶屋白金氷川社ノ側常梅（床梅トモ書ク）梅ガ茶屋ノ地内ニ此梅アリ自梅ノヨシ遊行上人ノ自筆ノ和歌アリ

麻布白金トイフ邑ニ世ニ名アル喬木ノ梅アリ此花ノ色香鮮明ニシテ又梅實トコシナヘニ梢ニミノリテ歳ヲコヘ侍ル故ニ世人是ヲトヽ梅ト云ルトゾ予今歳ノ秋ヨリ又ノ年ノ彌生マテ此里ニ旅居セシニ彼アルジシバシバ來リテ此名ヲツケ侍

リヲ以故ニ詩人墨客ノ笑ヲカヘリミズ名木ノオモハクヲ忘レ侍ラズクダクダシキ和歌一首ヲヨスルヲシカリ

他阿一海（今按遊行五十二世宝暦ノ末ナリ）

高く千歳をおめてみのふとき梅

其花の色も白かれ名も高く千歳をおめてみのふとき梅

又一種常梅

常梅マタ不断梅トモ云ヘリ伊賀上野某氏ノ園ニアリ単瓣淺紅ノ花ニテ實熟スレバ胭脂ノ如シト云フモノ未ダ其種ヲ見ズ冬梅中ノ奇品ト云フベシ

怡顔齋梅品云常梅一名不断梅達按ルニ伊賀上野某氏家園ニアリ単瓣淺紅實熟スレバ肉胭脂ノ如シ後變シテ青色ト成ル久ク蔕ズ

（ヒン）

〔大正八年五月八日伊藤寫ス（ノ）後寫〕

此ふみ梅の考ハ一白園齋藤兼光ノ遺書ナリト云フ。大正八年五月八日翁ノ遺族ハ東京市牛込区西五軒町二十三番地齋藤圭蔵氏（一白園ノ遠孫）ヨリ借覧ス。外ニ翁ノ遺著『皂莢之縁記』ト『常夏考』ト（大澗寫源著）ノ二書モ同時ニ借覧ス。今ヲコノ二書ト比較對照スルニ、三書共ニ大澗寫源ノ自筆ニ係ル。一白園ハ植物ノ寫生画ニ巧ナリシト雖モ、文章ハ一切不可能ナリシ由、道猿ノ話ナリ。依テ梅ずんこ、始ッテふみ梅ト呼ビ、一白園ノ説ヲ大澗寫源ノ筆記ヲ以テ綴リシモノニアラザルカ。

伊藤寫ス記

特7
129

No.

右故一白圓法[illegible]
就有[illegible]
[illegible]一白圓牡丹圓
昭和十三年[illegible]
伊藤[illegible]

外[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]先生

東京市牛込區[illegible]軒町三番地

齋藤[illegible]盛様

齋藤金藏様

昭和十二年二月[illegible]

大正八年[illegible]月[illegible]日

伊藤用箋

齋藤[illegible]盛様

齋藤金藏様

伊藤[illegible]

(復刻版)

国立国会図書館　タイトル『皀莢之縁起』　請求記号 特7-129
ガラス使用

特7
129

No.　　月　　日

證

一金拾五円也

右故一百圓御辰墓料として

慥有候段

但シ一百圓内四拾円ハ

明治三年二月五日

伊藤博文

外務

加藤弘之

大阪西月台

市外隠居町第三番地

伊藤博文

国立国会図書館　タイトル『皂莢之縁起』　請求記号 特7-129

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『皀莢之縁起』 請求記号 特7-129

ガラス使用